

# 待兼山俳句会

第六百八十五回

世話人

山田安廣・鈴木輝子・寺岡翠・根来眞知子  
東中乱・向井邦夫・森茉衣

令和六年三月十八日（月）

会場 大阪俱楽部 会議室 締切 午後二時

出席者

瀬戸幹三・山戸暁子・上田恵子・小出堯子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・寺岡翠  
向井邦夫・森茉衣・山田安廣

投句者

植田真理・碓井遊子・西條かな子・鶴岡言成・中嶋朱美・中村和江・西川盛雄

根来眞知子・東中乱・東野太美子・平井瑛三

出席者十名+投句者十一名 計二十二名

兼題

暖か・剪定（幹三） 春の闇・目刺（暁子）

当季雜詠 通じて八句

次回

例会 令和六年四月十五日（第三月曜日） 会場

大阪俱楽部 会議室 締切 午後二時

兼題

花曇・虻（幹三） 春の海・雪柳（暁子）

その他当季雜詠

選者吟

給食の大鍋干され暖かし

幹三

犬居らぬ犬小屋にある春の闇

あほやなあしやあないなあと暖かし

春の闇前ゆく人を吸ひ込みり

やはらかきものを踏みたる春の闇

暁子

薙抜けば目刺の眼闇の穴



・やはらかきものを踏みたる春の闇

暁子

加えて「尖り」に気づくところが素晴らしい。

うるんでいるような、情感のある闇であり、そこには妖艶さもあります。作者はいったい何を踏んだのでしょうか？そういう謎も含めて「春の闇」です。

・春の闇前ゆく人を吸ひ込みり

暁子

夜。人が見えなくなつたというだけのこと。それがふと吸い込まれたように思えた、というのです。妖しい闇の感じがよく分かります。

・剪定の刃の光るあり垣の内

兵十郎

先ず剪定の音に気づいたのでしょう。覗いてみると確かに人が動いている。そして手元に刃物の光が見えた。そういう時間経過として鑑賞いたしました。

・白壁に我が影法師暖かし

安廣

モノトーンの世界です。しかもフォーカスが合っていない、ぼーっとした自分自身の影。春の到来を思わせるすてきな取り合わせです。

・剪定の切り口白く尖りたり

安廣

剪定の仕事ぶりやその仕上がりを詠む句は数多あります。この句ではぐーっと近づいて見てています。白さに

・春の闇犬の首輪の光りけり

遊子

夜の庭。じやらりと鎖の音がして、犬小屋を見ると…ということなのでしょうか。しかし昨今犬は殆ど室内飼い。明るい部屋の中にはいます。ひよつとして昔飼つていた犬への思いが見せた「光」なのか。春の闇はいろいろ想像させてくれます。

暁子 選

剪定の鉄の音や日は高し

真理

帰宅後に庭でうろうろ暖かし

茉衣

目刺焼くうつろな眼一列に

輝子

◎初蝶黄しあはせ庭に撒くやうに

太美子

奥能登は神楽大蛇の春の闇

盛雄

◎給食の大鍋干され暖かし

幹三

剪定を終へて明日は湯治とか

輝子

單調な剪定の音静寂打つ

茉衣

◎千されても土佐の荒波恋ふ目刺

和江

春の闇心の闇にかぶさりぬ

眞知子

春の闇もののけたちの足音す

眞理

剪定の梯子の妻を仰ぐなり

春の闇太宰をりさう情人と

干からびし目刺に我の少し似て

◎卒寿過ぎ変はらぬ暮らし暖かし

カンテキに海の色無きめざし焼く

海の色波の音残して目刺

息殺し何かが潜む春の闇

剪定は庭師に任せ俺散髪

地震あれど戦なき国目刺焼く

眼ならず口刺されしも目刺かな

春の闇雨降る夜はなほ深し

◎剪定の音のみ寺の堀高し

春の闇呼びとめられて身の竦む

### 暁子 特選句講評

・初蝶黄しあはせ庭に撒くやうに

太美子

虚子の「初蝶来何色と問ふ黄と答ふ」という有名な句

を意識して、「初蝶来」を避けられたのかもしれません。

それとも黄色を強調されたかったのかもしれない。中七

下五素敵な句です。

・給食の大鍋干され暖かし

幹三

低学年の子ども達が下校する頃、給食室では後片づけ

の最中。洗った大鍋を干すと春の日差しが鍋に当たつて

反射する。もうすぐ春休みだ。

・干されても土佐の荒波恋ふ目刺

和江

認知症になつて何もかも忘れてしまつた人でも、生ま

れ故郷のことは覚えておられるそうだ。魚も人も故郷に

対する思いは同じだ。

・卒寿過ぎ変はらぬ暮らし暖かし

言成

八十を過ぎると日々、出来なくなることが増えてくる。

同じ程度の暮らしを維持することは本当に大変です。それが九十過ぎても保たれているというのは、頭の下がる思ひだ。今年も無事に寒い季節を乗り越えられた作者の安堵の気持ちが表現されている。

・剪定の音のみ寺の堀高し

兵十郎

静かな道を歩いていると剪定の小気味よい音が聞こえてくる。気がつけば丁度寺の堀にさしかかっている。大寺だろうか。作者はその音に中の様子を想像しておられ

る。

互選三句

朱美 選

客と座し語る縁側暖かし

芳しき香に足止める春の闇

門限に帰らぬ子待つ春の闇

息子三人年頃には幾夜もそんな事があつたな。

邦夫 恵子 かな子

邦夫 選

暖かや日を背に波止の太公望  
夫の遺句例句に見つけ暖かし

暖かさ手のひらに受くお薄かな

春の茶会で客が茶碗を手にした時のほっこり感。

瑛三 太美子 恵子

恵子 選

ポケットの中でつなぐ手あたたかし  
暖かやつまづきし身を支へられ

剪定の梯子の妻を仰ぐなり

奥様への溢れるやさしい気持ちを感じました。

輝子 曜子 亂

和江 輝子 幹三

瑛三 選

あたたかや金魚いきさか太り氣味  
暖かやみどり児抱きて親となる

大仏の胎内にある春の闇

着想面白い。案外心で泣いておられるかも。

和江 選

暖かくうらうらの日に友送る

樹々の氣息もうるほふて春の闇

帰宅後に庭でうろうろ暖かし

仕事終へ気持ちもほつと、物の芽も庭のあちこちに。

堯子 選

和江 輝子 幹三

言成 選

ポケットの中でつなぐ手あたたかし

犬居らぬ犬小屋にある春の闇

朧月光たたえし銀の髪

妻の白髪を目立たせる月光を讃える心理も年の功か。

輝子 幹三 真理

かな子 選

干からびし目刺に我の少し似て

幸薄し目刺になるを一期とす

あはやなあしやないなあと暖かし

上2句は自嘲か達観か。私はしゃあないなあが好き。

安廣 幹三 乱

堯子 選

一椀の今昔を継ぐ暖かさ  
暖かや今日の一会を拾ふ旅

春の闇に土の香満てる雨の宵

惠子 兵十郎 安廣

太美子 選

暖かや心の角の丸くなる

雨温し木々の芽も吾も背伸びする

はるばると山国に来し目刺かな

季語の目刺がよく効いて、妙に納得させられる。

暁子

翠

暁子

輝子 選

初蝶黄しあはせ庭に撒くやうに

太美子  
兵十郎

太美子

兵十郎

原種なれば花まろきままチユーリップ

和江

和江

父ふむといつもの皿に目刺二尾

和江

和江

いつもは主菜を盛る皿に、目刺が二尾。はてな？

兵十郎 選

大居らぬ犬小屋にある春の闇

幹三  
暁子

幹三

暁子

リズムよき剪定の音向ひより

幹三  
暁子

幹三

暁子

暖かや心の角の丸くなる

心の角も丸くなるような暖かさとは人の情であろうか。

茉衣 選

春の闇前ゆく人を吸ひ込めり

暁子  
遊子

暁子

遊子

春の闇犬の首輪の光りけり  
錢湯へ続く夜道の暖かし

夜錢湯に行くのが寒い日々だったのに暖かくなつて幸せ。

眞知子 選

春闇に我也溶け行く雨の夜

大居らぬ犬小屋にある春の闇

やはらかきものを踏みたる春の闇  
給食の大鍋干され暖かし  
やはらかきものを踏みたる春の闇  
それまでとは違う柔らかく湿つた闇がいかにも春。

安廣

幹三

幹三  
暁子

真理 選

やはらかきものを踏みたる春の闇

暁子  
幹三

暁子

幹三

給食の大鍋干され暖かし

幹三  
かな子

かな子

やはらかきものを踏みたる春の闇  
暖かや座して本読む磨硝子

磨硝子の暖かな眩しさが目に浮かびます。

暁子  
かな子

暁子

かな子

翠 選

剪定の翁鼻歌ブギウギと

恵子  
乱

恵子

乱

剪定の梯子の妻を仰ぐなり

邦夫  
朱美

邦夫

朱美

原種なれば花まろきままチユーリップ

幹三  
幹三

幹三

幹三

原種の花の特徴まろきままの音が心地よい。

盛雄 選

客と座し語る縁側暖かし

どこまでも歩いて行きたい暖かさ

隧道の春闇の筒出でにけり

トンネルの春闇の筒の表現が詩的で素敵である。

安廣 選

参加者自選句

身を任す暖かな日にしどけなく

乱  
かな子

門限に帰らぬ子待つ春の闇

かな子

暖かやみどり児抱きて親となる

輝子

親となつた喜びを子どもの暖かさを介して見事に表現。

遊子 選

暖かや足裏にある耳のつぼ

幹三

剪定は庭師に任せ俺散髪

瑛三

暖かや今日の一会を拾ふ旅

兵十郎

思わぬ出会いのある旅の季節になつた高揚感の伝わる句。

乱 選

暖かさ手のひらに受くお薄かな

恵子

はるばると山国に来し目刺かな

恵子

暖かき土手に寝転び手を翳す

邦夫

眩いほどの暖かさを土手に享受する喜びを詠つた。

田楽や囲炉裏阿蘇路の芳しさ

乱 遊子

春闇に我も溶け行く雨の夜

安廣

寒明けの水の濁りや鯉動く

盛雄

剪定の梯子の妻を仰ぐなり

朱美

どこまでも歩いて行きたい暖かさ

瑛三

暖かや日を背に波止の太公望

和江

父ふむといつもの皿に目刺二尾

かな子

暖かや座して本読む磨硝子

邦夫

暖かき土手に寝転び手を翳す

恵子

剪定の翁鼻歌ブギウギと

邦夫

花落とす躊躇の中に春の闇

和江

田起こしをじつと見ている鴉かな

かな子

初蝶黄しあはせ庭に撒くやうに

輝子

暖かやみどり児抱きて親となる

邦夫

暖かや今日の一会を拾ふ旅

兵十郎

単調な剪定の音静寂打つ

和江

止んだかと覗けばうるむ春の闇

かな子

春の闇もののけたちの足音す

邦夫

春闇に身を置き人生省みる

翠

田楽や囲炉裏阿蘇路の芳しさ

真理

春闇に我も溶け行く雨の夜

眞知子

寒明けの水の濁りや鯉動く

朱美

剪定の梯子の妻を仰ぐなり

安廣

ひとこと

山田安廣

## —卓上の

「あらせいとう（ストック）」

「原種チューリップ」「目刺」を詠む —

目刺見る真剣な目の句友たち

暁子

切花のストック句座に匂ひたる

邦夫

のぞきこむ原種とかいうチューリップ

恵子

チューリップ原種をいかに改良す

堯子

青の濃き生命残せる目刺焼く

輝子

句座統べてあらせいとうの七重八重

兵十郎

あらせいとう色さまざまに乱舞せり

茉衣

生前はうるめいわしといふ目刺

幹三

原種とぞ句座の灰色チューリップ

翠

色とりどり句座賑はすあらせいとう

安廣

安廣さんが句会にもつてきてくださったチューリップの原種は、我が家の中のテーブルの上で昼は開き、夜は閉じています。中は白い花びらの下半分が黄色で花芯も黄色です。

暁子

また、例会で出席の皆様方にお諮りした結果、待兼山俳句会内部で出来る体制を作ろうと、色々検討して参りましたが、どうしても体制が整わない為、久次米様のご厚意で当面は外注を続ける事となりました。また、私どもの財政を考慮下さり、従来の半額で受託して頂ける事となりました。

幹三さんより「季語は末尾に置く方が生きる事が多い」との示唆がありました。